通信第五十七号　実地の歩み

十月二十三日の住職継職法要が近づいてきました。一回一回のお月忌まいりにも感慨がって来るようです。「喜ばしい出来事だけど、淋しい気がします」と言われますと「全く来なくなるのではありませんよ」とお返しします。三十四年間、深いご因縁のが培われてきたことが改めて知らされます。さらに曠劫以来の不可思議なご因縁であります。

この度の法要は私にとって、生前葬のような感じがして来ました。こんなにも有難い終わり方ができるのか。二年間延期となったこともよい期間でした。すべてご本願のおはからいでありましょうか。

思えばこの地に自覚の信心の世界を根付かせたいと意気込んで帰ったものの、空回りの時期がずいぶん長くありました。もちろん今でもどれだけ浸透したかというと、心もとないことであります。しかし、気づかされてみると、大石先生はじめ皆様のお陰で私自身がお育てを受け、救われ続けてきたのであります。

二十七年前、大石先生から「江本さん、あなたが火のように努力してもどうにもなりませんよ。無始以来の過去生からの将棋倒しの宿業ですからどうにもならないのです。ただし、ご本願が信じられたら立ち上がれるのですよ」とのおおせがその通りであったとこの頃味わわされます。「弥陀たのむ一念」。たのむ一念は弥陀のご廻向でありますから、こちらからの世界が消されます。消せしめたもう浄土の世界が帰る世界。また、出発の世界と転換されます。

清沢満之先生は「我信念」の中で

　　自力の無効なることを信じるのは、私の智慧や思案のありたけを尽くして、その頭のあげようのない様になる、という事が必要である。これがはなはだ骨の折れた仕事でありました。

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　清沢満之先生のおことば　永田文昌堂　３９頁

思いという世界を人間は自力で生きています。この思いの我城は死んでも離さないと本能的に守ります。人間の自力でどうにかなるものではありません。その間は頭でわかっても苦しみは消えません。私がそうでありました。

森ひなというご同行さんに「他力、他力と思うていたが思う心がみな自力」というお言葉があります。ひなさんにおける救いの体験からのお言葉でありましょう。

九月七日から九日、高岡市の超願寺さんのご法座に二カ月ぶりにご縁を頂きました。

往きの車中で、平成十九年二月二十日、京都、中村万助商店にて大石法夫先生御法話のテープ起こしのコピーを持参しました。車中一気に読ませて頂き、新高岡へ着くころ読み終えました。十五年前に読ませて頂いた時と全く違っていました。

先生は癌の手術をされて思うように言葉が発せられません。参加者の中に死刑囚となられた方のご両親さんがおられます。先生は翌年の五月に亡くなられました。最後に近いご法話です。

　　証知生死即涅槃

　　必至無量光明土

　　　救われたら必ず、無量光明土に生まれる、これ、絶対界です。生死を超えた世界です。で、刑をね、免除してもらうとか、刑を受けんようにしますというのはみな迷いです。刑を受けんでも死ぬんです。娑婆は。わしもそうです。

よくぞ聞き取りにくいテープを起こしてくれたと法喜さんに感謝の念が起こりました。「その後テープを聞いてもよくわからない、あの時は本願力でさせられた、よく聞き取れないことにも慣れていたのかもしれない」とのことです。大石先生の面会謝絶のとき法喜さんと共に病室に行き原稿を持参すると、「読んでおきます」と先生は言われました。私はとても読めるはずがないと思いました。しかし、先生は読むつもりでおられたのでしょう。自身の癌病とⅠさん方の切羽詰まった状況の中で、ご本願がいかにはたらき救うたかを読みたかったのではないでしょうか。面会謝絶の中を三度でかけました。最後の時、私は落ち込んでいました。信心が明らかでないのに先生はいなくなるという思いでいっぱいでした。「最後の一言をお聞かせください」と申し上げますと、先生は法喜さんを呼び握手されました。私もあやかる気持ちで手を出すとはねのけられました。私は突き落とされたようでショックが大きかったです。しかし、それが最後のお育てであったのです。

さて、超願寺法座ではこのたびも一人ひとりのお同行さん方が深まっておられることが有難かったのです。少し紹介させて頂きます。

　Ｔさんの息子さんは私の二男と同じ病気をかかえております。Ｔさんは何度もがんの手術をされました。病院から声を聞きたいと電話をかけて下さったこともありました。

この度の感話で、初めて娘さんの事に触れられました。主人に死別され、子供をかかえてのアパート暮らしをしている中で、亡き主人の家から「帰ってほしい」と四回連絡があり「帰るところがあるからありがたい」という娘さんの言葉を聞いて、Ｔさん自身が「浄土という帰る世界があることを改めて気づかされて有難かった」と、青年のような明るく透き通ったお顔されておられました。これから三か月で二か所の癌の手術をされるお方とはとても見えません。生死を超えておられるのだなと思わされ感動しました。その時、刈谷市の水本健太郎さんと同じ世界を感じさせられました。

　如来清浄本願の

　　無生の生なりければ

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　聖典４９３頁

と、親鸞さまのご和讃にありますが、生と死という対立を超えた世界に生まれるという念仏往生の世界が実現されておられるお姿を仰がせて頂きました。

継職法要の用意等で十日近くたちました。十八日、今晩は台風十四号の大風雨の中で書かせて頂いています。かつて体験したことのない台風とのことですから、大きな被害があれば法要どころではありません。昼には緊迫感の中でユーチューブ第五十五法話「実地の仏教」をあげさせて頂きました。その中でも触れていますが「何年もかけて切り開いた畑が一晩の雨でつぶれても、わしは笑っておれる人間よ。だが、やるだけのことはしておく」と、藤解先生は雨の中を大石先生たちと共に水をせき止める仕事をされたと、かつて大石先生からお聞かせいただいたことです。畑のトマトのビニールやごみ入れのコーンを撤去しつつ思い出されたことです。

また、「摂取とは、この心身を如来のものにして頂いて、願いに生きる活動をさせて頂く、如来さまに使っていただく事である」との藤解先生のおおせに身も心もふるい立さされて仕事をさせて頂けました。夜はあまり眠れませんでした。本堂や家がどうなっても「南無阿弥陀仏があるから」と聞こえたら安心して眠れました。

二十日、台風は思いのほか被害はありませんでした。早速、法要のパンフレットを総代さんたちに届け、後片付けを少しづつさせて頂きました。

大石先生は敗戦となり、生きる支えを見失っていた時、藤解先生に出遇われました。「この先生の生きるよりどころは、戦前も戦中も戦後も変わらないよりどころがある」と知らされ浄土真宗に入られたのでした。台風がどうなろうと事実に受け入れて歩まされる道があることを活動しながら知らされたことであります。

　九月末には常照・法喜共著の「光あり」というタイトルの本が継職記念として出版されます。今、最終段階の校正をさせて頂いています。大石先生との出遇い、ご本願の救いとそれからの歩みが一貫してつづられています。ご縁の皆さんに読んでいただければ幸いです。

人間の思いは昔を懐かしむとか、未来を危ぶむという事になりがちですが、それでは救いとなりません。本願念仏の時、大石先生、親鸞さま蓮如さま、諸先生がた、念仏同行の皆様方が生きておられます。大石先生は自身を「テストパイロット」と仰せられたことがあります。それぞれの宿業の中でいかに救われていくのか実地が試されることであります。

　二人の同行さんのお便りを紹介させて頂きます。

　　いつも通信をお送りいただきありがとうございます。南無阿弥陀仏の命に生きる者にまで自分は育てられた。多くのご因縁を頂いて来たことに感謝しています。「業縁のもよおさば、いかなるふるまいもすべし」私の今までをふりかえるとその後に続く言葉は「罪悪深重の凡夫」です。毎日の生活の中で苦しみ悲しみみじめさがついてまわります。そんな時、送りました小物入れを作っている時は何も浮かばないし無になります。とても不思議にいつもおもいながらうれしい時です。

　　　今は車の運転はしなくなり自転車でご縁をいただける所へ聞法に行っています。そんな時もナンマンダブツ　ナンマンダブツと自転車をこいでいます。ふと不思議に江本様に送りたいと思い立ちました。おまかせです。南無阿弥陀仏　お元気で

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　近藤正枝

　私が苦しみもだえている時、大石先生から「単純作業をしなさい」と言われ、畑や掃除をする

ようになりました。今は楽しみながらさせて頂いていますので近藤さんに共感いたします。たく

さんの小物入れはご縁の方々におすそ分けさせて頂きます。

　　次には桑名市の伊藤たね子さんです。

　　私事ですが春頃より体調がすぐれず弱気になった日々を過ごしています。

　生きる意欲がわかず、つらい気持ちでおりました。

　ところが、通信５６号分中親鸞様の磁石のお例えに引きつけられました。

　　「仏は仏のままに、凡夫は凡夫のままに。仏凡一体」・・・心にひびくお言葉。

　　「シャンと生きなさいとありハッとしました。何より感謝です。なむあみだぶつです。

合掌

発行させて頂く甲斐があったとうれしく励まされたことであります。

　　互いに励まし励まされ　　ご恩報謝の　この暮し

　　皆これ他力の功徳なり　　自力そえたらぞ

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　藤解照海先生作の歌

二〇二二（令和四）年九月末日　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　常照